

石の寝屋〈ねや〉（淡路町岩屋）

今から千五百もの昔には、淡路にも大きな鹿やいのししがいっぱいいたようです。もちろん、良いお米や魚もずいぶん豊富だったものですから、それらの品物が次々に朝廷〈ちょうてい〉に送られていました。その頃の話です。

允恭〈いんぎょう〉という天皇が、ある年の秋、淡路へ狩りに来られました。草木のおい茂った山や野には、大鹿や猿やいのしがいくらもいましたし、そして空には鴨〈かも〉、雁〈かり〉がむらがっていましたが、たった一つのえものもありません。ふしぎに思った天皇は、連れてきていたうらない師に、その訳をうらなわせました。

すると、そのうらないの中に、伊邪那岐〈いざなぎ〉神社（一宮町多賀）の神様が出てきて、言うことには、

「このたび、天皇が一つのえものも得られないのは、これは私がしたことである。実は、赤石〈あかし〉（明石）の海の底に真珠〈しらたま〉がある。それを取ってきて私に祭るなら、このあたりのえものを残らずとらせよう。」

その話を聞いた天皇は、すぐに近くの海人〈あま〉を大ぜい集め、さっそく赤石〈あかし〉の海にもぐらせました。けれども、海が深くて、誰一人、底近くまでもぐれる人はいません。

「ええい、ふがない海人たちだ。名の聞えた海人を知らぬか。」

「申しあげます。隣の国の阿波〈あわ〉（徳島県）の長邑〈ながむら〉という所に、男狭磯〈おさし〉という人がおります。この人は、他の人の倍ももぐれるということでございます。」

「では、さっそく使いを出せ。」

こうして、阿波から呼び寄せられた男狭磯は、天皇の命令で真珠を取りに海へもぐることになりました。腰に長い長い縄をつけて、みるみるうちに海の底へ消えていきました。

しばらくして浮び上ってきた男狭磯は、

「この底に、とても大きなあわびがあり、それが光っている。けれど、とても深くてあそこまではもぐれそうもない、どうしよう。」

舟の上の人々は、くちぐちに言いました。

「それこそ、島の神様の欲しがっておられる真珠にちがいない。なんとかそれを取ってください。」

「どうか、わたたちの神様を喜ばせてあげてください。」

「けれど、さっきもぐったので、縄はもう五十尋〈ひろ〉（一尋は、約一・五メートル）をこえてたぞ。これ以上はとてもむりだ。」

男狭磯はしばらくの間迷っていましたが、やがて決心したように、再び海の中に消えていきました。縄はぐんぐんと伸び、さきほどの五十尋はもうこえていました。誰もかれもかたずをのんで見守っていましたが、六十尋にもなった時、縄を引く合図があった。

「やったぞ。それ、早く引け。」

みんなは、必死で縄をたぐりよせましたが、海面に浮んだ時には息も絶え、波の上に死んでしまいました。

けれども彼の腕の中には、とても大きなあわびがしっかりといだかれていて、その貝の中には、なんと桃くらいの大きさの、それは美しい真珠が入っておりました。

それを伊邪那岐〈いざなぎ〉神社に祭りますと、神様のおおせの通り、たくさんのえものを得ることができましたが、天皇には、男狭磯の死がかわいそうではありません。身分の低い人の死ですが、天皇は男狭磯のために大きな墓を作り、ていねいにとむらってあげました。



現在、岩屋の浜から山の方へしばらく登っていくと、「石の寝屋」と人々が言っている、大きい石組みがあります。これは、昔の古墳〈こふん〉のあとです。土地の人びとは、それを男狭磯の墓と呼び、遠い昔、悲しく死んでいった人の物語りを今に伝えています。